

# 「正信偈」について（第十回）

正信偈の教え上 古田和弘、正信偈のこころ限りなきいのちの詩 戸次公正、等による  
いっさいぜんまくぼんぶにん

一切善悪凡夫人 一切善悪の凡夫人、

もんしんによらいぐぜいがん

聞信如来弘誓願 如来の弘誓願を聞信すれば、

ぶつごんこうだいししょうげしや

ひと のたま

仏言広大勝解者 仏、広大勝解の者と云えり。

ぜにんみようふんだりけ

是人名分陀利華 この人を分陀利華と名づく。

## 【意訳】

一切の善や悪をなす愚かな人びとも、阿弥陀如来の広大な誓願のことを聞いて信ずれば、釈迦仏は、広大なすぐれた理解を持つ人と言われるのである。このような人を白い蓮華と呼ぶのである。

善人であろうと、悪人であろうと、一切の凡夫が阿弥陀如来の広大な誓願について聞信するならば、それぞれの善悪に関係なく、釈尊は、その人びとのことを広く偉大な、勝れた見解をもつ人であるといってくださいるのだと、親鸞聖人は教えておられるのです。

阿弥陀の誓願は、どのような人でも、例外なく救いたいと願われた願いです。しかも、およそ往生とは縁がないと思われるような人、自分の力ではとても往生できるはずのない人、その様な人をこそ救いたいと願っておられるのです。

したがって、阿弥陀仏の本願からすれば、世間で善とされる人も、悪とされる人も、まったく関係のないことなのです。有能な人も、無能な人も、区別がないのです。本願は、人の善悪や能力を超えていて、それらを全てまとめて包み込むような、大きな力なのです。

ただ、誰にとっても、阿弥陀仏の本願について説かれた教えを聞信することが大切だと教えてあります。聞いて信ずるといふことは、どのようなかたちであろうと、教えに触れさせてもらって、触れ得た教えを疑わないことです。

そもそも疑いの心というのは、教えよりも、自分の思いや考えを大切にする時に起こります。だから「信ずる」といふことは、何かのために信ずるとか、信ずれば自分はどうなるかとか、そういうことではなくて、「はからいを離れよ」と教えられているように、自分の思いを離れ、教えに対して自分に謙虚になることではないでしょうか。

阿弥陀の本願について教え示された釈尊のお心に触れて疑わないならば、善であろうと悪であろうと、その人は、釈尊が期待してくださった通りの、勝れた了解をもつ人になれるのです。そのような人はまた、「分陀利華」と名づけると、親鸞聖人は詠っておられます。

「分陀利華」というのは、蓮の華のことです。蓮の華のなかでも、とくに白い蓮の華です。白い蓮の華は、インドではプンダリーカと呼ばれていました。中国語に翻訳するとき、インドの言葉の発音を漢字で写し取って、「分陀利華」という文字があてはめられたのです。

世間の泥にまみれている哀れな凡夫、煩惱にあふれた日常に埋没して、そこから抜け出そうにも抜け出せない悲しい凡夫、何が人生の最後の依り処なのかかわからず、そのわかっていないことすら、わかっていない愚かな凡夫、そのように情けない凡夫であるからこそ、阿弥陀仏は救いたいと願っておられるのだと教えられています。

私たちの日常は、まさに「卑湿ひしつの淤泥おでい」であります。釈尊と親鸞聖人の教えからそのような我が身のありようをつくづくと思ひ知らされて、阿弥陀から私たちに差し向けられている願いのことをよくよく聞かせてもらい、疑うことなく素直になって信じるならば、その人こそ泥の中に咲く白い蓮華であるといわれているのです。何ともありがたいことです。